
Caf e Sweets

若竹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C a f e S w e e t s

【Nコード】

N 1 7 9 2 S

【作者名】

若竹

【あらすじ】

この小説は、企画【candy store】に参加している短編小説集です。

当店では様々な味わいのスイーツを用意しています。よろしければ、こちらをお楽しみ下さい。

Menu 1 アイスクリーム

「……美味しい」

小さなスプーンで、淡雪のように冷たいそれを掬うと口の中にそつと含む。

カサついた唇から吐息を零すと、妻はうっとり少女のように微笑んだ。

妻の幸恵の手には白い小さなカップがある。中には雪のように白いミルクアイスが入っていた。

小さなカップを持つその手はかつて、艶のあるぷっくりとした手だった。

過去に何度も繋いで握りしめたその手との、あまりの違いに夫の良夫はわずかに眼を伏せた。

堪らない。

胸を締め付けられるようだった。しかし、その想いを妻には悟られたく無かったので、表情に出ないよう胸の内に閉じ込める。

今の幸恵の手には、かつての様なぷっくりとした張りはない。カサついてしまった皮膚の色は血色が悪く、青みがかってくすんでいる。

細く、骨が浮き出てしまった手には小さな皺が寄っていた。

幸恵の左の薬指にぴったりと嵌まっていた結婚指輪は、今ではサイズが大きくなってしまい合わなくなっていた。

「幸恵、まだまだあるんだよ。もう一口どうだい？」

「ええ、嬉しい。あなた、買ってきてくれてありがとう。私が好きなのを覚えていてくれたのね」

幸恵がもう一口ミルクアイスを口に運ぶ様子を、良夫は真剣な表情で見守った。

いつぶりだろうか、妻がこんな風に食物を摂ったのは。

良夫は表情が崩れそうになるのを何とか堪えた。眼の奥がジンと熱く、視界がぼやけそうになるのを堪えて、笑顔を浮かべた。

このアイスを買って本当に良かった。

良夫は心からそう思った。偶然にも今日は仕事が終わった後、珍しく自宅に真つ直ぐ帰らず寄り道をした事で買う事が出来たのだ。

良夫は病気の妻が気がかりで、何かに追われるように今日も仕事を片付けた。担当部署の誰よりも早く仕事を切り上げると、会社の駐車場に停めてある自家用車に乗り込んだ。いつものように自宅目指してまっしぐらに帰る。

だが、帰りの道のりはスムーズとは言えなかった。今日は何故だか交通量が多く渋滞していた為に、何度も赤信号に引っ掛かる。ハンドルを握る指が落ちつきなく動き、音を立てる。荒々しくネクタイを緩め、車内に表示されている時計を見ると、いつもより帰宅に時間がかかっている。

深く溜息をついて信号を眺めると、ずっと先の方まで赤い光が灯っている。

まるで赤提灯が連なっているかのようなだと良夫は思った。

辺りは薄闇が徐々に降りて来て、微かに明るさを残す空には早くも白い星が瞬いている。

良夫は車のモールランプを点灯させた。

ふと、信号とは違う鮮やかな赤が眼に入る。視界に入ったのは菓子屋の赤い看板と屋根。

菓子屋を見た瞬間、良夫の脳裏には幸恵の顔が浮かんでいた。

あいつ、甘い物が好きだったな。

食べられるものなら何でもいい。もしかしたら、甘い物なら食べ

れるかもしれない。

良夫はそう思い、赤い屋根の菓子屋に立ち寄った。

小さな菓子屋のショーケースにはケーキの他にプリンやゼリー等がちらほらと並んでいる。夕方の為か、ケースの中には殆ど商品が残っていない。

ふとみると、ケースの隣に小さな冷凍庫が添えるように置いてある。中を開けてみると、カップのアイスクリームが並んでいた。

幸恵が昔、アイスクリームを美味しそうに食べていたのを思い出した。

これにしよう。

これならば、口だけが良いので食べやすく、栄養もありそうだ。アイスクリームは一個300円と少し高かったが、良夫は何種類か買うといそいそと自宅に戻った。

自宅に帰るとぐったりとした幸恵が何とか体を動かして良夫を迎えてくれた。

幸恵の弱々しいお帰りなさいという声に、良夫の表情が歪む。

「無理しなくても、寝てていいんだよ。どうだい、体調は？」

「今日は吐き気が治まっているから、いつもより少しだけ楽なの」

「……そうか、何か食べれたのか？」

その言葉に幸恵は微かに眼を伏せると首を振った。

その仕草は良夫の眼には酷く弱々しく見えた。

良夫は妻をソファに休ませると、冷蔵庫から冷えたスポーツドリンクを用意しコップに注いで妻に飲ませた。

落ちついたところで買ってきたアイスクリームを用意して、幸恵に差し出したのだった。

幸恵は去年大腸癌が発覚し、癌と共に大腸の半分を手術で切除した。その後、手術をした場所に癌が再発した為抗がん剤の治療をしていた。

抗がん剤という強い薬は副作用も強く、幸恵の体力を容赦なく奪っていく。治療を続けることに弱って行く幸恵はどんどん痩せて枯れ木のようになり、髪の毛もごっそりと抜け落ちた。

口の中には口内炎が幾つも出来てしまい、吐き気の上に痛みで物が殆ど食べられなくなった。

果たして、次の治療に幸恵の体力は持つのだろうか？

治療が出来なかったら、幸恵の癌はどうなるんだ？

不安と恐怖が良夫の中に湧き上がった。

それは、幸恵が自分を一人残して居なくなるのではないかという不安だった。

幸恵のいない生活など考えられない。25年間、空気のようにお互い自然と寄り添って生きてきた。

苦しみも喜びも共に分かち合い、時に喧嘩をしながらそれでもずっと二人でやってきたのだ。

子供には二人恵まれた。

二人の子供はそれぞれ独立して結婚し、この家から出て行った。

二人の子供は時々様子を見て帰って来てくれるのだが、二人共自分の家庭と仕事があるので負担を掛けたくは無かった。

良夫は幸恵に三口目のアイスクリームを勧めたが、もういいと幸恵は首を振った。

「ごちそうさま。とても美味しかったわ」

「もう少し食べなさい。明日は受診の日だろう」

良夫は幸恵が持っているアイスクリームのカップを受け取ると、少し多めに掬って更に一口、なかば強引に食べさせた。

次の日、抗がん剤治療の為に幸恵が病院へ受診するのを良夫も付き添った。

だが、幸恵は受診するとすぐに入院を勧められた。

食事摂取が出来ない事で栄養状態が悪化し、急遽入院する事となったのだ。

とても治療を続けられる状態では無かった。

いずれにせよ、今のままではどうにかなっていただろう。

しかし、抗がん剤の治療を中断したら、どうなってしまうのだろうか。

再発した癌が進行し、大きくなってしまつのではないか？

そんな不安が良夫の中にはあった。

無機質な診察室は冷たく良夫の心を突き離しているようで、更に不安を煽る。

不安を表に出さないよう努力して表情を繕っていたが、良夫の心は溺れそうになっていた。隣に座る幸恵の表情を窺うと、ぎゅっと眉をよせて口元が硬く強張っている。カサカサになって痩せた二つの拳が微かに震えていた。

「先生、治療を中断しても大丈夫なのでしょう？　癌が進行しないのでしょうか？」

幸恵が擦れた声で、絞り出すように医者に尋ねた。

すると、医者はパソコンに幾つかの画像を表示すると二人に見せてくれた。

「これが前回の検査結果ですが、今回の結果では癌が縮小しています。血液の検査結果も改善しています。ですが、他の臓器に負担が掛かっているので、今回は少し休んで体力を付けた後から治療しましょう。大丈夫、副作用さえ落ちつければ今は順調ですよ」

その言葉を聞いた途端、幸恵は涙ぐんだ。

今まで余程不安で辛かったのだらう。幸恵のピンと伸ばした背中

から力が抜けると、途端にぽろりと涙が落ちた。

良夫は丸くなった幸恵の背中に手を添えると、そっとその背中を撫でた。微かに震えていた妻の背中は、いつもより少しだけ温かいように感じた。

良夫は幸恵の入院の手続きを済ませると、落ちつくまで傍に付き添った。

病院のベットに横たわる幸恵の顔は最近になって見た事が無い程穏やかな笑顔だった。

大丈夫、順調だ！ まだまだやれる。

これからも二人で寄り添って、癌と戦って行くのだ。

良夫の眼には微かに希望の光が見えていた。

M e n u 1 アイススクリーム（後書き）

読んで下さいましてありがとうございます。
またお越しく下さい。

Menu 2 飴

朝から降り続いた雨は止む気配を見せず、窓の外には暗く重たい曇天が広がっている。

男は濡れた傘を閉じ、そのまま警察署入り口の傘立てに突っ込んだ。

重たい鞆の中から分厚い資料を取り出すと、片手に持って眼を通してながら自分の所属部署へと向かっていった。

数日前から忙しい日々が続いている。今日も昼飯さえ食べる時間が無い。

俺は溜まった疲れと強い空腹を感じて苛付いた。こちらの努力をあざ笑うかのように、犯人の手掛かりは一向に掴めない。

俺は手に持った資料を机の上へと放った。分厚い資料は重たい音を立てて、デスクの上でページを開く。

ついでに重たく感じる自分の体も投げ出すように、デスクの椅子へと腰掛ける。

安物の椅子はすぐにギシギシと悲鳴を上げて、俺の体を受け止めた。このオンボロめ。

俺は煙草を吸おうとごそごそとポケットを探ったが、出てきたのは空になった煙草の箱だけだった。

思わず舌打ちが出る。俺はぐしゃりと箱を握り潰し、ゴミ箱へと投げ捨てた。しかし、潰れた箱はゴミ箱から外れ、床に落ちる。

「くそっ」

俺はゴミ箱を蹴っ飛ばしたくなりながら、ご丁寧にゴミを拾い直して捨てた。

そんな俺の目の前に、小さな袋に包まれた飴玉が差し出される。
「どうぞ。疲れていらっしやるようね。糖分を補給されてはどうです？」

そう言ってくれたのは、同じ課の女刑事だった。

彼女は茶色く染めたショートカットの髪型に、スタイルの良い体を地味なグレーのスーツで包んでいる。彼女の笑顔と生き生きと輝く瞳が、俺の瞳に澁刺と映った。

俺は彼女に礼を言くと、飴をひとつ口に頬張った。口の中に甘酸っぱいレモンの味が広がっていく。

からり、ころり。

口の中で飴玉を転がすと、乾いた音が口腔から鼓膜へと伝わった。からり、ころり。

じわりと、飴の味が一層強く広がって行く。口の中に砂糖の甘さがねっとり広がった。

飴の甘さが、今回の事件を嫌でも脳裏に甦えらせる。

心がざわつき、ちくちくと針で刺されているようだった。

飴を舐めている筈なのに、強い口渴を感じて落ち着かない。俺は、口の中のまだ大きな飴玉をガリガリと音を立てて噛み砕いた。

脳裏に検視の結果がちらついた。

連続殺人事件の被害者の口からは、極僅かに飴の成分が検出されていた。

事件の被害者は二人、共に10歳に満たない女児であった。二人は裸体で胴体と四肢が切断された姿で発見された。

最初の事件では、遺体は死後一カ月以上経過しており、頭部と胴体が当県県北の山中で発見され、四肢は資材置き場で発見。

二人目の事件では死後一週間で発見される。同じく頭部と胴体は当県県西の山中で、四肢は市内の空き地で発見された。

遺体には共に絞殺された跡があり、被害者が抵抗した形跡が見ら

れた。

一人目の被害者には、遺体の奥歯に飴が少量付着していた。被害者は飴を噛み碎いて食べる嗜好があったようだ。更に、二人目の遺体からは口腔内より極僅かに還元麦芽糖水飴、着色料など飴に含まれる成分が検出された。また、二人目の遺体には胃に内容物の残渣が無く、空腹時に殺害されていた。

二つの事件は犯行の手口から、同一犯である可能性が高い。また、内容からして単独犯だと推測された。

ただし、共に死亡してから遺体の発見までに時間が経過している為不明な点が多く、この事件をより難解にしていた。

俺は机の上に投げた資料を手を取った。開いているページには、推測される犯人像が描かれている。

犯人は非常に自己中心的かつ残忍な性格である。非常に用心深く用意周到で粘着気質。また、コミュニケーション能力や他者への共感能力に欠ける。空想と現実との区別ができず、思い込みが激しい為、他人の意見を受け入れられない非社会的な性格である。

このような人格形成は、幼児期に家族からの愛情やコミュニケーションが受けられず、学生時代においても周囲と馴染めず孤立した環境で過ごしたまま、成人になった場合に形成されると考察される。

俺は、再度現場の目撃証言へと目を通した。

最初の被害者は下校時に友人と別れた後、自宅へと帰るわずか5分の間で行方が分からなくなっている。次の被害者は公園で友人と遊んでいる間に消息を断っていた。共に、ほんの数分間の出来事であった。

この事から、犯人は土地勘がある者で用意周到に計画し、犯行を行った可能性があった。

また、犯人の犯行目的は遺体の状態から異常な性的欲求を満たす

為の行為である事も窺えた。なぜならば、二人の被害者は性的暴行を受けた形跡があったからだ。

ここは、昼間であるにも関わらず真っ暗でじめじめとしていた。小さな雑然とした部屋の窓は遮光カーテンが引かれ、テレビだけが薄暗い光を放っている。

テレビの前には人影が一つ、じっと画面を見つめていた。画面の中のニュースキャスターは、緊張した面持ちで記事を読み上げている。

今日も連続殺人事件のニュースだった。手掛かりはほとんど無く、今だ犯人は捕まる気配が無い。

僕はニュースを見ながらほくそ笑んだ。

無能な警察に僕を捕まえられる訳が無い。

唐突にドアを叩く音が部屋に響いた。

部屋の外から声が聞こえる。それは久しぶりに聞く父親の声だが、内容は相変わらずだ。部屋に籠らず仕事をしろというものだ。僕はそれを無視して日記へと手を伸ばした。

0月x日

コンビニのレジで支払いをする時に、店員の態度が悪かった。店員は大人の女だった。僕は大人が嫌いだ。奴らは人を、偏見で固まった眼で見る。誤った価値観や固定観念を押し付けて判断するんだ。だから僕は、純粋な心を持つ子供が好きだ。特に明るくて優しい女の子が大好きだ。彼女達は僕を嫌な眼で見ないし、可愛い笑顔を

向けてくれる。今日は麻衣ちゃんのお友達が公園で楽しそうに遊んでいるのを見かけた。

0月x日

今日は麻衣ちゃんのお友達に声を掛けてみた。母親から、知らない人に付いて行かないように言われていると、麻衣ちゃんの友達はやった。母親は余計な事を教えている。

僕も麻衣ちゃんと友達だと伝えたと、彼女はすんなり仲良くしてくれた。子供とは何とも単純だ。名前は愛香ちゃんと教えてくれた。素直な所がとても可愛らしい。やはり、子供は良い。

今日は僕の母親と久しぶりに会った。話す事など何も無い。

月x日

愛香ちゃんと友達になった証に僕の好きな飴をあげた。美味しいと言って食べる姿が可愛かった。笑顔も明るくて、僕は愛香ちゃんの事が好きになった。

僕の背後から、あいつも楽しそうに見ているのが分かる。僕は更に気分が良くなった。あいつも愛香ちゃんが良い子だと分かっているだろうから。

次は愛香ちゃんを、僕の部屋に招待しよう。麻衣ちゃんも僕の部屋を気に入ってくれていた。

月x日

愛香ちゃんを部屋に招待した。部屋一面のビデオ、DVDに愛香ちゃんは驚いていた。僕のコレクションを見て、愛香ちゃんはレンタル屋さんみたいに沢山あると喜んでいいる。愛香ちゃんが楽しそうなので、僕も嬉しかった。僕は、愛香ちゃんに此処は二人だけの秘密基地だと説明した。大人には知られてはいけないので、母親にも黙っておくように愛香ちゃんと約束した。

背中のおいつが、愛香ちゃんと会っている事は秘密にしると煩い

からだ。

久しぶりに今日は楽しかった。麻衣ちゃんが居なくなつて寂しかったが、今は愛香ちゃんが居る。

背中をあいつが、いつもより顔をずっと前に覗かせているのが分かった。

月×日

あいつが背中から身を乗り出してきた。僕はあいつがこれ以上前に出ないように、何とかあいつを宥めた。背中に戻すのは疲れる。最近、あいつがどんどん前に出てくるようになった。ああ、愛香ちゃんと会って話したい。

月×日

あいつが僕の前に立っている。あいつは昨日よりもずっと強くなつていて、背中に戻るように言い付けても、全く言う事を聞かない。ああ、今は僕があいつの背中を見ている事しかできない。これではいつもと逆だ。僕の苦しみをあざ笑うかの様に、あいつが笑い声を上げた。僕の振りして愛香ちゃんに声を掛けるつもりだ。愛香ちゃん僕に気付いて。

月×日

あの日、あいつは愛香ちゃんを僕の部屋に連れてきた。あいつはとても悪い事をするつもりだ。僕は、あいつの背後から何度も止めようとした。でも、僕には見えている事しかできない。

愛香ちゃんは、あいつがあげた飴を美味しそうに舐めている。楽しそうにはしゃいでいる愛香ちゃんの服をあいつは脱がせた。愛香ちゃんが歪んだ顔になって、小さな身体が海老みたいに何度も跳ねた。愛香ちゃんの口から泡が噴き出している。ああ、あいつは恐ろしい事を次々と……。

月×日

愛香ちゃんは僕と遊んでくれなくなった。あいつのせいだ。愛香ちゃんも麻衣ちゃんと同じになった。これでは、初めに仲良くなつた桜ちゃんと一緒ではないか。

僕はあいつの後ろから、見慣れてしまった愛香ちゃんの後片付けを見ていた。

僕は日記を閉じた。

テレビの上にある双眼鏡を手にとると、カーテンの隙間から公園を眺める。

双眼鏡の中にはポニーテールの子が満面の笑顔で遊んでいた。可愛い。今度こそ、この子とずっと仲良くしよう。

殺人課の電話が、空気を裂く様にけたたましく鳴った。

近くにいた女刑事が電話を取る。

「警部、また新たな犠牲者が出ました。山本愛香、8歳です。遺体の発見場所は……」

新たな犠牲者が出てしまった。

「くそつたれ！」

俺は、脱いでいた上着を掴むと現場目指して駆けだした。

M e n u 2 飴（後書き）

読んでいただきまして、ありがとうございました。

Menu 3 クッキー

「遂に完成したぞ」

白衣を着た白髪頭の老人は、興奮に震える手をのばした。

老人は机の上に覆いかぶさるように、じつとりとそれを眺める。

やがて、唇を捻じ曲げると唸り声の様な笑い声を漏らした。次第に抑えきれないとばかりに、皺の寄った唇から零し続ける。

ついには大きく開口し、大音量となった。老人は胸を天に向く程仰け反らせ、濁流の如く哄笑を撒き散らした。

「ただいまー」

学校から帰宅した私は手に持っていた鞆をソファの上に放り投げた。

「お腹すいた！ お母さん、今日の晩御飯何？」

鞆の隣にどつかと腰を下ろす。既にお腹はぺこぺこで、空腹の為にお腹が何度も恨めしそうに鳴いている。いつも、部活の後はお腹が空いて堪らないのだ。

「あれ、このクッキーどうしたの？ 美味しそう！」

私の眼はお菓子の皿に釘付けとなった。珍しくクッキーなんかが置いてある。

どれ、アーモンドとジンジャー、黒ゴマか。

私は黄色のクッキーをパクリと頬張った。サクリと軽やかな歯応えを伝えたクッキーは、口の中で仄かに生姜の香りを漂わせ、ほろほろと崩れては無くなっていく。

「うわあ、変わった食感。美味しー」

私が興奮しながら食べていると、奥のキッチンからお母さんが手を拭きながら出てきた。

「おかえり、小華ちゃん。そのクッキーはお爺ちゃんがさっきくれ

たのよ」

「へえ、珍しい」

キッチンからは美味しそうな匂いが漂ってくる。どうやら、今日の夕食はハンバーグみたい。

私は好物の晩御飯に思わずニンマリした。浮かれた気分になった時、ふとお母さんの言葉が引つ掛かった。

今、お爺ちゃんからの差し入れて言ったよね？

「お爺ちゃんからだって？ …… やだ、食べちゃった。どうしよう、とんでも無い物じゃないといいけど」

お爺ちゃんからというクッキーに、私は一抹の不安を覚えた。何となく胃が重くなってくる。

私のお爺ちゃんは科学者なのだけれど、いつも変な研究ばかりしている。おまけにその発明たるやとんでもない物ばかりで、幼い頃から良い思い出なんて無い。

突如、リビングの扉がもの凄い勢いで開いた。

「はあーっはっはっはっ！ 小華、それを食べおったなあ！」

この声は、丁度話題のあの人だ。

「お爺ちゃん！？」

リビングの扉を思いっきり開けて、入ってきたのはお爺ちゃん。

……の筈だが、そこに居るのは見た事の無い男性だった。

黒々と濡れたように艶やかな髪、涼やかな眼、すっと通った鼻筋。背筋がピンと伸びた均整のとれた体。長い手足。

奇抜な赤と黒のぴったリフィットレザーに身を包んだ、ちよっと痛い感じの男性だ。

「え？ だ、誰？」

かっこいい、服装は最悪だけど。私は小さく呟いた。不覚にも見とれてしまう。

「フフ、わしじゃよ、亜門戸じゃ」

「ええっ?! うそおつ、お爺ちゃんなの? 信じられない、もしかして若返っちゃったの?」

なんと、信じられない事にお爺ちゃんが若返った姿で現れたのだ。眼をぱちぱちさせて擦ってみたが、その姿は変わらない。私は口から胃が飛び出しそうなくらい驚いた。

お母さんも、菜箸を持ったまま固まっている。

「見たか、わしの開発した能力向上変身クッキーの威力を!」

お爺ちゃんは得意げに、胸をありえない程反らせて大笑いしている。そのままひっくり返るんじゃないだろうか。

「小華、そろそろお前にも変化が現れるぞ」

お爺ちゃんはとんでもない爆弾を落とした。

「えええっ! さっきの食べちゃったのは、まさかつ」

すると、私の体は異様に熱くなってきた、内側から光を放った。

「あつ、あああーんっ」

聞くに堪えないお恥ずかしい声を発しながら、私は変身してしまった。

「やあつ! 何これっ。超ハズかしいよう」

顔の半分くらいを覆うミラーグラスに体を包む白と黄色のぴったリレザー。ミニスカートに白のロングブーツ。なんと、とんでも無くセクスのない格好となっていた。

おまけに私のスタイルは今までと何ら変わらないという、拷問の様な仕打ちだ。

「どうなってんのよっ! お爺ちゃん、今すぐ元に戻してよ!」

「フハハ、心配せんでも効果は30分。切れば元に戻るから安心しろ」

「安心できるかつ!」

「もちろんお前とわしだけでは寂しいだろうからな、もう一人用意したぞ。出でよっ駒雄!」

お爺ちゃんの呼びかけに、開いた扉から黒い影が躍った。あつという間に私の右隣には全身黒ずくめの男性が現れる。

「ぎゃーっ、お父さん！」

「や、やあ小華。お前も巻き込まれちゃったか」

いつものお父さんはビール腹に禿げ上がった眩しい頭なのだが、こつちも若返って別人となっている。髪はフサフサ、体は引き締まった見事なスタイルだ。

何、この不公平さは。

お爺ちゃんはミラーグラスをびしっと掛けると、私とお父さんの真ん中めがけて跳んできた。

「とうっ！」

見事な宙返りだ。効果音がしそうなくらい。

「三人戦隊、見・参！」

一言毎にビビッとポーズをとる。それにしても、ダッサイネーミング。

「ちよっ、あわ

「う、うわっ」

お爺ちゃんに反応して私達の体も勝手に動く。強制的に息の揃ったポーズを取らされてまった。

眼の前で、お母さんがわあとか言いながら拍手してる。止めて、お願いだから。

「よし、今から町のパトロールに出動だ。行くぞ、セサミ、ジンジャー。とあうっ」

どうやらジンジャーが私でセサミがお父さんらしい。食べたクッキーの種類がそのまま呼び名になっているみたい。という事は、ジンジャー以外のクッキーは黒ゴマとアーモンドだったから、お爺ちゃんはアーモンド？

何だか、これで私も終わってしまったと思った。

お爺ちゃんのリビングの窓をぶち破って、そのまま日が落ちた夜の町へと飛び出して行った。

それに続いて私の体も勝手に窓から飛び出ていた。体が驚く程軽く、ひとつ飛びでお隣さんの屋根の上へと着地する。

おお、凄いな。もう、色々とありえない。

お隣さんには迷惑な事この上ないが、どうやら発明クッキーのお陰で身体能力が驚異的に向上してるみたい。

背中を追い掛けるように、お母さんの怒った声が聞こえた。窓をぶち破って出てきたのだから当然だ。

お父さんが隣で必死に謝りながら走ってる。

「母さんごめんよ。ホントにゴメン。でも、俺の意思じゃないんだ。ああ、俺の今月のお小遣い、これでパアかも」

今のお父さんに、父親としての威厳はどこにも見当たらない。

私達は前方を忍者のように走るお爺ちゃん、いや、アーモンドを追い掛けて、こっ恥ずかしい格好のまま走り続けた。

町の中を三つの影が縦横無尽に走り抜ける。

幻のような三つの影に、鋭い声が掛かった。

「待てっ！ お前達」

声は、ほっそりとした人影が発していた。しかし、胸だけは大きく、重力に反して揺れている。

見ると、黒マントに異様に露出度の高い服、網タイツに黒ブーツと痴女かSMプレイ中としか思えない女が電柱の上に佇んでいた。

「お前達が、これ以上騒いでいるのを見過ごすわけにはいかぬ。神妙にせよ」

パトロールの筈が、何故だか悪役になっている私達。

しかも、よりによってこんな格好の人に言われたくは無い。

「うぬっ、怪しい奴、何者か？ 貴様こそ、そのけしからん巨乳にお仕置きしてやるぞい」

「ああ、爺さん。そのセリフ、悪役そのものだよ」

「まったくね」

この変態爺め。後でお婆ちゃんに言い付けてやる。私は硬く心に誓った。

こんなお爺ちゃんでも、お婆ちゃんにだけは頭が上がらないのだ。いくぞつ、女。アーモンドクラアッシュ！」

どうやら必殺技らしいけど、物凄く弱そう。最初から碎けているしね。

予想は的中し、あっさりとかわされてしまった。

「うぬつ、わしの必殺技が通じんとは。なんと恐ろしい奴よ」

「ふふ、其処までか？ ならば今度はこちらから行くぞ。受けてみよ、沢庵セイバー！」

た、たくあん？！ 予想外の武器に私達三人は隙だらけとなった。それを見逃す巨乳痴女では無い。

どつという音と共にお爺ちゃんは屋根の上で崩れ落ちた。

「お、お爺ちゃんっ」

「安心しろ、峰打ちだ」

沢庵のどこに刃が？ 全く分からないけど手加減してくれたらしい。

「そこの二人。これに懲りたなら大人しくするがよかろう。さらばだ」

女は白い巨乳を揺らしながら夜の闇へと消えて行った。

この後、私達がおじいちゃんを抱えて一目散に帰宅したのは言うまでも無し。もちろん途中で30分以上経ってしまい、帰宅前には変身が解けていた。

「あー、今回も酷い眼にあっちゃったよ」

「はは、そうだなー。爺さんもこれに懲りて、反省してくれると良いんだがなあ」

お爺ちゃんの脳みそに反省と言う文字は無い。無理だよそんなの。「わしには反省すべき点など何も無いわ！」
ほらね。

私は晩御飯のハンバーグをつつきながら、お爺ちゃんを無視する事にした。

リビングは時折風が吹き抜けた。何度もカサついた音が虚しく響く。お爺ちゃんがぶち破った窓を新聞紙で覆ってあるのだ。

やけに静かなお母さんが怖い。

今晚のお父さんにはビール無し。当分の間、晩酌は無いと確信できる。

私は溜息をついて、小皿に盛ってある沢庵を箸でつまんだ。

沢庵。この偶然の一致が私を何とも言えない気分させる。

「小華、この沢庵おいしいだろう？ 今回の出来はまあまあだよ」

「うん、美味しいよ、お婆ちゃん。お婆ちゃんの漬物はいつも美味しいよね」

そう答えると、お婆ちゃんは皺くちやの顔をより一層シワシワにして、不思議なくらい楽しそうに笑った。

M e n u 3 クッキー（後書き）

読んでいただきまして、ありがとうございました。

Menu 4 ぶりん

鮎川良は溜息をつきながら、先生の話をぼんやりとした表情で聞いていた。

6月の教室は湿気を孕み、じっとりとした重たい空気に覆われている。教室内は蒸し暑く、窓を開けてなお、不快だった。

しかし、良にはこの教室そのものが不快に感じていた。一カ月経っても一向に馴染めない学校は、良にとって居心地の悪さしか覚えな場所だった。

良は5月にこの田舎の小学校に転校してきたのだが、良はこの田舎にも、このクラスにも馴染めない。都会で別れてきた友達を恋しく感じ、馴染めない事でさらに孤独感を募らせていた。

気が付くと、先生の話は終わっていた。良は殆ど話を聞かずに過ぎしてしまい、いつの間にやら任されていた飼育当番に、戸惑うばかりだった。

「ねえ、鮎川くん。私達、今日から飼育当番一緒だね。よろしく！」
クラスメイト達が帰った後、静かになった教室で良に声をかけたのは、一緒に飼育当番を任命された上野菜緒だ。愛嬌のある顔にシヨートカット、良と同じ位の背丈で活発な女の子だった。

「よろしく」

良は短く返事を返し、そっぽを向いた。その態度は愛想の良い菜緒とは正反対だ。

「じゃあ、早速プリンに餌をやって、水槽の水を代えようよ」

そう言つと、良の返事を待たずに教室奥の水槽へと向かった。

水槽の中には一匹のクラゲがふわふわと泳いでいる。見た目は頭でっかち短足で、掌サイズの図体は頭がクリーム色、足が茶色だった。このクラゲ、見た目からぶりんと名付けられていた。そう言え

ば、今日の給食に出たプリンとそっくりだ。

水槽に一匹だけのクラゲは、とても寂しそうに見える。転校してから今だ友達のいない良にとって、クラゲと自分は似た者同士のように思えた。

このクラゲは昨日担任の先生が突然持ってきたのだ。なんでも学校の池で見つけたらしく、早速クラスで飼う事となったが、珍しい事に淡水に生息するクラゲだった為、塩素の入らない水で飼育していた。

菜緒がクラゲに餌を与えている。

良は換えの水槽を抱えると、川の水を引き入れている学校の池へと向かった。後ろから菜緒が追い掛けてくる。

「鮎川くん、重くない？ 私と一緒に持つよ」

「別に」

空の水槽は良一人でも持てる重さだった。それに、何となく菜緒に手伝ってもらうのが気恥ずかしい。

良は相変わらず愛想の無い返事を返し、菜緒に戸惑った表情を浮かべさせた。

良は水槽に水を入れて持ち上げた。先程まで一人で持てた水槽は、水の入っている状態だととても重い。しかし、先程断った手前、良は意地でも一人で運ぼうとした。結果、途中でひっくり返してしまい、良の服も床も水でびしょ濡れにしてしまった。

「大丈夫だった？ 鮎川くん。濡れちゃったね」

菜緒はポケットからハンカチを取り出すと、良の濡れた手足をさつと拭き、素早く掃除道具入れから雑巾を取ってくる。

広範囲に濡れた床を、菜緒は手際よく拭いていった。

良は恥ずかしさと情けなさで一人顔を赤くし立ち竦んだが、菜緒が床を一生懸命拭いているのを見て、慌てて一緒になって床を拭く。拭き終わると、今度は二人協力して水槽を運び、クラゲを丁寧に

移し替える。

「ふふ、ぷりんったら、気持ち良さそうだね」

菜緒は楽しそうに笑顔を浮かべた。

「うん、そうだね。上野さん、さっきはありがとう」

菜緒は花がほころぶような、眩しい笑顔を見せた。

夕日が教室の窓から差し込んでくる。雲の隙間から放射状に放たれる夕日は、周囲の空間に紅く濃厚な陰影を造り出し、神秘的に空を染め上げ二人の心を奪う。夕日は空だけでなく、二人も染めていた。

良は夕日に照らされた菜緒の表情に見惚れたが、菜緒の慌てた声で我に返った。

「ねえ！ 見て、鮎川くん。早くっ」

菜緒の指差した方向を見た時、良は自分の眼を疑った。

水槽のクラゲが泳ぐように、宙に浮いていたのだ。

「ぷりんが浮いてる！」

「ぷりん、宙を泳いでいるよっ。ね、鮎川くんも見えるよね？！」

「見えてる。……うそだろっ」

二人は固まったまま、しばらくクラゲを見続けた。視界のクラゲは、しばし宙を漂った後、再び水槽の中へと戻って行く。

「幻でも夢でもないよな。確かにぷりんが宙に浮いてたよな」

「うん。見間違いないよ！ だって、私達二人共見ていたものの眼の錯覚ではなかった。」

二人はそのままクラゲを見続けたが、再度宙に浮く事は無かった。

クラゲが浮くなど信じれない。クラゲには鳥や虫の様な羽は無く、飛行可能な形態ではない。しかも、宙に浮いていた。つまり、何か別の能力を使ったのだ。まさか、超能力だろうか？ クラゲが驚異の進化をしたとでも？ 良の空想はどこまでも広がった。

それからの放課後、毎日遅くまで良と菜緒は、クラゲの世話を甲斐甲斐しく行った。しかし、クラゲは一向に浮かぶ気配を見せない。瞬く間に飼育当番の期間は過ぎて行く。二人は期待してクラゲを毎日観察したが、さすがに夢か錯覚だったと思えてきた。

当番最終日。良は諦めた気持ちで水槽の水換えを行う。もう、浮かぶ事など期待しない。見間違いだと考えるようになっていた。

「ねえ、良くん。窓の外、見て」

「何？ 菜緒ちゃん」

二人は自然と下の名前で呼び合うようになっていた。外を見ると、以前にも見た不思議な程に美しい夕焼けが広がっている。

「とっても綺麗で、不思議な空だね」

その時、背後で小さく水の跳ねる音がした。振り返るとクラゲが再び宙に浮いていた。

「な、菜緒ちゃん！ 浮いてるよっ」

「凄いつ。やっぱり見間違えじゃなかったんだ！ あっ、どこ行くのっ」

「待てっ」

クラゲは水の中で泳ぐように、空中を移動する。すいすいと、素早く開いている教室の窓から外へ出て行ってしまった。

このままでは見失ってしまう。二人は弾かれた様に、クラゲを必死で追いかけた。

クラゲは水の中で泳ぐタコの如く全身を使って宙を泳いだ。そのスピードは意外と速く、視界から消えてしまいそうだ。二人はクラゲを夢中で追って、学校裏の山の中へと入って行った。

前を走っている菜緒の姿がどんどん小さくなっていく。良は菜緒の足の速さに驚きながら、必死で走り難い山道を進んだ。菜緒はこの山道に慣れているのか、身軽に進んで行き、あっという間に良との距離が離れていく。

良はとにかく菜緒を追って走り続けた。

良が漸く菜緒に追いついた時、菜緒は木々の開けた空間に立ちつくしていた。

「菜緒ちゃんっ、ぷりんは？」

「しっ。あれを見て」

菜緒の示す方を見た良は、驚きのあまり声が出なかった。

薄闇の中、沢山の淡い光が点滅しながら乱舞していた。まるで、群れ飛ぶ蛍のように。

蛍より大きな光源は、夜に染まりつつある闇の中で、色鮮やかに仄かに光る。様々な色みを帯びた光はビー玉のように美しく、優しく、そして心惹かれる輝きだった。

その輝きを纏い、浮かんでいるのはクラゲだった。水の中で淡く光るように、何匹ものクラゲが宙に群れて命の灯し火を輝かせる。クラゲの足元には池が広がっている。澄んだ水を湛えた池はクラゲの光を水面に映し、オーケストラの如く無音の音色を響かせた。

無意識の内に、良はふらふらとクラゲに向かって足を進めていた。美しいクラゲ達に魅入られていたのだ。

「良くんっ、危ない！ それ以上は行っちゃダメ」

菜緒の声が良を正気に戻したが一足遅く、良の足はずるりと滑って、冷たい水の中に引き込まれてしまった。

派手な音と悲鳴が静寂を破る。

池から這い上がろうと必死でもがく良の足に、水中に生えた水草がどんどん絡み付いてくる。動けば動く程、良は身動きが取れなくなっていた。

菜緒は良の右手を掴むと、必死で引き上げようとする。しかし、子供の力では到底及ばず、逆に菜緒の方が引き摺られていた。

「良くん、頑張って。今、引き上げるから！」

その言葉とは裏腹にどんどん良は沈み、菜緒も引き摺られる。菜緒は手が離れないようしっかりと力を込めた。

「絶対に助けるから！ 良くんは大切な友達なんだからっ」

良は首まで水に飲まれてしまい、口から水が入り込んだ。まともに息が出来なくなり、パニックに陥る。水は鼻からも容赦なく入り込み、激しい呼吸困難と苦しみが襲った。良は確実に迫ってくる死を感じて戦慄した。

必死で助けを叫ぶ。良も、菜緒も。

良の意識が遠くなりかけた時、突然呼吸が楽になった。何度も咳き込んで水を吐きだしながら、身体が引き上げられた事を感じていた。

見ると、良と菜緒は沢山のクラゲ達に取り囲まれていた。

「……浮いてる。僕達浮いているよっ！」

「良くん！ 良かった、あのまま死んじゃうかと思った。大丈夫？」
「うん。それよりどうなっているんだろう？ もしかして、ぷりんが助けてくれたのかな」

眼の前を光るクラゲ達が泳ぐように浮いている。周りを見渡すと、二人はクラゲのように池の上に浮いていた。

二人の体はどんどん高く浮上して行き、遂には遙か下に木々が見えるまで昇った。

空からは、良達の住む小さな町が眼下に広がって見える。町の明かりがポツポツと光を放つその様は、小さな宝石を散りばめられたようだった。

「良ちゃん、町が見えるよ」

「うん、とっても綺麗だね。知らなかった、こんなに素敵な町だったなんて」

繋いでいる菜緒の手と同じように温かく、感動が良の心を満たしていく。

不意に二人の体は宙を進み出した。風を切って鳥のように裏山の上を舞う。二人は手を繋いだまま両手を広げ、風を感じて空を飛ぶ。二人の体は裏山を超えて学校へと向かって行った。

着地したのは学校の池の中だった。

二人はびしょ濡れになってしまったが、不思議な体験と感動で、全く気にならなかった。

次の日、いつもより早く登校した良は菜緒と共に水槽を見て驚いた。いつの間にか、水槽には二匹のクラゲが泳いでいたからだ。

「ぷりん、お嫁さんが出来たのかな」

「そうか。昨日のはクラゲ達のお見合いだったんだ！」

二人は眼が合うと、お互い笑い合った。良はこのクラゲが寂しそうだとは、もう思う事は無かった。

良自身のように。

M e n u 4 ぶりん（後書き）

読んでいただきまして、ありがとうございました。

Menu 5 みたらし団子

金曜日のオフィスはいつも慌ただしい空気に包まれている。夕刻だと言うのに仕事は落ち着かず、ひっきりなしに電話が鳴っては、新たに雑務が増えていく。時間と仕事に追われているその様は、まるで自分自身の余裕の無さを表しているかのようで好きじゃない。

少しの溜息を零して私は仕事を再開した。パソコンの画面は、酷使して疲れている目には酷くまぶしく感じられる。

「ねえ、美和。時間までに仕事は終わりそう？」

同僚の寺本百合が話しかけてきた。彼女の肌はとても白くて、スタイルはすらりとしている。大きな可愛らしい瞳と人形のように巻いた茶色の髪が、彼女を若々しく見せていた。

「うん、大丈夫。もう少しだから」

「今日のコンパ、7時からよ。間に合う様に6時半にはここを出る予定だからね」

百合は私が時間に間に合いそうか確認をすると、自分の席へと戻っていった。少し急がないと。溜まっている仕事を思い出しながらも、壁の時計を見た私は作業のピッチを上げる。

「田中美和さん。少し教えてほしいんですが、今いいですか？」

あともう少しで仕事が終わるところで、2年後輩の小川大地が私の所へやって来た。彼の説明によると提出した書類に不備があったらしく、私は時間を気にしながらも、困惑している様子の小川君に修正箇所と理由を説明してやった。

小川君は入社三年目でそろそろ仕事に慣れても良い頃なのに、こうやって時々私の所へ相談にやってくる。私としては、もう少ししっかりしてほしいと思うのだけれど、それは求め過ぎなのだろうか。

どうにか約束の時間に間に合わせ、大急ぎで服を着替えると、洗面所に直行してメイク直しをする。落ちてしまったファンデーションを塗り直し、最近気になってきたシミを隠す。隣の百合はグロスをたっぷりと塗って、アイメイクも少し濃い目に直していた。随分気合が入っているみたい。

「今日こそはいい男がいるといいわね。私、30歳までには結婚したいの。でも、会社にはこれっていう男なんていないじゃない？」
「そうね。でも、それは百合の理想が高いからじゃないの？ 選り過ぎなのよ」

「そんな事無いわよ。それより今日の相手は三菱商事の社員だそうよ、期待できそう」

私と百合は同じ年の同期だ。百合はいつも、30歳までには結婚したいと口癖のように言っていた。あまり口には出さないけれど、私だってそれは同じ。出来たら二十代の内に結婚したい。けれども現実では、気が付けばあつという間に27歳になっていて、23歳で彼氏と別れてから4年間、ずっと一人ですると年だけ取ってしまった。このまま仕事だけを生きがい生きて行く気はないし、昇進して人の上に立ちたいという野心も無かった。

このまま何も無い自分に、焦りだけがゆつくりと埃のように募っていく。せめて、何もしないでいるよりはと、最近では料理教室に通い始めていたのだけれど、何かがぼろぼろと指の間をすり抜けて行くように、何も変わらない自分が同じ場所に立っていた。

コンパは私達を含めて女5人、男5人の状態だった。人数は合っていたのであぶれる事はなかったけれど、ほとんどの男性は私より年下ばかりだった。一人だけ、二歳年上の男性がいたけれど、その人にはこれといって惹かれる物が無く、魅力をまるで感じなかった。少しでもいいと思うような相手には、すかさず若い女の子達が隣の席を陣取ってしまい、私は全く近寄れそうにもない。百合はいつの

間にか気に入った男性の傍に座って、なかなか良い雰囲気になっている。いつもはしないような、お酌や料理の取り分けなんかを甲斐甲斐しくやっているのを見ると、なんとなく嫌な気分になる。まるで、媚を売っているように見えてならなかった。彼氏はほしいけれど、あまりがつついていて見るように見られたくない。焦っている自分なんかを他人に悟られたく無かった。

私にとって今日のコンパもはずれでしか無かった。年上の男性がメルアドを聞いてきたけれど、多分唯の礼儀みたいなものだろう。私はその男性の名前すら覚えていなかった。

理想の男性なんて出会いが無い。良い男は大抵早いうちから結婚しているか、決まった相手がいるものなのよ。その夜私は一人、電車に乗って帰宅した。途中、電車の窓に映る自分の顔はやけに影が濃く、窓の向こうのまばらな家庭の黄色い明かりが、自分の実家を感じ出させた。

休日が終わり、再びいつもの日常が戻ってくる。今日も相変わらず忙しく、仕事に追われる日々だった。

「美和、そろそろ休憩どう？ もう昼の時間だよ」

百合が小さな袋とお財布を手にもっている。

「うん、あと少しで終わるわよ。小川君の仕事を少し手伝ったら、直ぐに行くから。先に食堂へ行ってくれ？」

「それじゃ、先に行って待ってるから。早く来てね」

そう言うと、百合は先に食堂へと向かった。その後ろ姿を見送った私は、小川君が金曜相談してきた書類が指摘した通り改善されているか眼を向ける。書類は指摘した箇所を含めて、指摘以外の場所も改善されていた。へえ、頑張ってるじゃない。私はほんの少し小

川君を見直した。

少し遅れて食堂に着くと、百合が定食を食べながら席を取ってしてくれた。この時間、食堂は結構混んでいて、席が空いていない事もあるのだ。

私は百合の向かいに腰を下ろすと、持参したお弁当を広げる。

百合はコンパのあと、良い雰囲気になっていた男性とどうなったのか、何も言っていない。多分、上手くいかなかったのだろうと私は解釈した。上手くいけば、百合の方から報告してくるだろうから私は昨日の話題には触れなかった。

「すいません、ここ空いてますか？ 席が埋まっています」

見ると、トレーを持った小川君が愛想の良い表情を浮かべて立っていた。

「空いているわよ、どうぞ」

返事をする、小川君は私の横の席に腰を下ろした。彼の昼食は百合と一緒に日替わり定食だ。

「田中さんは今日もお弁当ですね。朝から作るなんて凄いな。一体何時に起きてるんですか？」

「そんなに大した事じゃないわよ。昨日の残りを詰めてきただけだし、あとはチンしただけ」

「そう？ 私なんて、お弁当を詰めるだけで面倒よ」

そう言いながら、百合はお弁当の中身を覗き込んだ。大した物な何もない、ただのお弁当なのに。

大げさに感心してみせる百合と後輩に、恥ずかしく感じた私は下を向きながらぼそと答えた。すると、その間に定食を食べ終わっていた百合が、先程手に持っていた袋を取り出した。

「ねえ、小川君、貴方甘いものとか食べられる？」

「え？ 食べますけど」

「実は今日、デザート持って来たの！ 丁度三本あるから一緒に食べましょうよ」

そう言いながら、百合は嬉しそうに袋の中からみたらし団子を取りだした。

みたらし団子は三本入りのパックに入っていて、串には四つ団子が刺さっている。周りにからめてある餡色の餡が艶々と光り、中心にある白玉の焦げ目が何とも美味しそうだった。

私は百合に勧められると遠慮なく、みたらし団子をいただいた。餡の甘さと醤油のしょっぱさが混ざり合って丁度いい。もっちりとした歯ごたえと、少しの香ばしさが口の中に広がって、堪らない味わいだった。

けれども、団子を三つ食べたくらいでお腹が一杯になってしまった。串には四つ団子が刺さっていたけれど、私にはちょっと多いのだ。三個目を食べた位になると餡がしつこく舌に残り、白玉といえは酷く素朴な薄い味わいだった。

ふと、残った団子は私自身のように思えた。余分なあまり物。餡がなければ取り立てて美味しい物でも無い、素朴な味。飾ったところで、特に目を惹く物なんてどこにもない。

あれこれと理想ばかりを並べてきたけれど、本当の私を好きになつてくれる人なんているのかしら。実際に私とつり合う人なんて、いないのかもしれない。

年を取る毎に理想ばかりが高くなって、一人歩きしていく。白玉団子のように素朴な自分を置き去りにして。

私は食べきれない、残りの一つをどうしようかと思いつながら、じつと無骨な串に刺さった団子を見つめた。

「美和、どうしたの？ 多かつたら残してもいいよ」

「うん。ゴメン、お腹一杯になっちゃった。悪いけど、多いから残させて」

すると、横から少し日に焼けた手が伸びてきて、ひょいと私の串を持って行った。

「僕、みたらし団子好物なんですよ。田中さんが残すなら、貰って

も良いですか？」

「えっ？」

驚いている私の目の前で、小川君は残りの一つを美味しそうに食べてしまった。

「僕、この餡も好きだけれど、中の団子自体も好きなんですよ。味とか歯応えとか」

そう言って、小川君は少し照れた様に笑った。その顔は、今まで気が付かなかったけれど、とても好感の持てる魅力的なものだった。

M e n u 5 みたらし団子（後書き）

読んで下さいまして、ありがとうございました。

Menu 6 チョコレート

こんなにも人を好きになるなんて、思ってもみなかった。今まで何事にも、これ程夢中になった事など無かったのに。

鈴川実が息を弾ませて店の中に入ると、ひんやりとした涼しい空気が実を出迎えてくれた。外は体温を上回る暑さで、エアコンの効いた店内は心地好い。

「いらつしゃいませ、鈴川さん。今日もいらして下さったんですね」美しい女性が笑顔を浮かべて実に声を掛けた。この店のオーナー、長野真由美だ。

真由美は魅力的な女性だった。真由美の雌鹿を思わせる黒い瞳が、実を映して弓のように細まると、それだけで実の頭がふわふわとしてしまう。

実は目の前の女性に合う為に、このカフェへ三日と開けずに訪れていた。通い始めて、はや半年。おとついてもカフェで会ったというのに、随分と会えない時間が長かったように感じられる。

実はアイスコーヒーとオーナーが勧めてくれたチョコレート注文し、定位置となっている窓際の席に腰かけると、狭い店内を見渡した。

店内はちらほらと席が埋まっている。アルバイトの店員が一人いるだけの小さな店は、オーナーが接客もこなしていて、暫らくすると真由美が注文の品を運んで来た。

「お待たせしました。今日もゆっくりしてって下さいね」

そう告げると、真由美は接客のためにカウンターへと戻って行った。実は離れて行く真由美の後姿から、視線が外せないでいた。真由美の腰は細くくびれ、女性らしい曲線を描きながら形の良い尻

へと続いている。スカートから伸びる足は、すらりと細く見事なプロポーションだ。

実は真由美に夢中だった。

一瞬でも真由美が自分だけを見つめて笑顔を向けてくれた。そう思うだけで、興奮のあまり手先が震えてしまうくらいだ。

真由美は二十八歳だと聞いたが、自分と同年代くらいに見える。彼女は三年前に結婚しているそうで、子供はまだいない。けれど、実としては、人妻であることが彼女の魅力を損なう要素とはなり得なかった。

むしろ、実の眼には既婚女性の落ち着いた雰囲気、同年代の騒がしい女性よりも魅力的に映っていた。

本音を言えば、真由美に会うために毎日でもここに通いたい。だが、しつこく来店して真由美に嫌がられたくはないし、毎日まっ昼間から、ふらふらとしているようにも思われたくない。そのためこのカフェに来る時は、いかにも仕事の合間に来たというような雰囲気であつた。だが、実際の所、実は大学を卒業してから二年間、定職に就く事も無くコンビニの深夜アルバイトという身で、毎日通うには懐具合が苦しかったのだ。

実は勧められた、真ん丸い五百円玉くらいのチョコレートを摘まんでみた。名前はボンボンショコラというらしい。

ボンボンショコラを一口で頬張ってみると、中はとろりとした食感の、味わいの違う何かが出てきて驚いた。一見しただけでは何が入っているか分からない、手間のかかったチョコレート菓子だった。一体何が入っているのだろうか？ 実は次のチョコレートを半分ほど齧ってみると、中にはクリーム状のチョコレートが入っていた。

これは外見と中身が全く違う、何が入っているか全く予測の付かないチョコレートだと思った。

「鈴川さん、お味はどうですか？ これは新作のチョコレートなんですよ」

真由美が話しかけてきた。この店に通っているうちに、真由美と気さくに会話ができるようになっていた。実際にしてみれば、ようやくここまで近付けたという所だったか。

「これは、随分手間のかかっているチョコですね。中に違う種類の物が入っていて。とても美味しいです」

「良かった。その中身はガナツシュって言っんですよ」

「ガナツシュ？」

「ええ、ガナツシュは偶発的な事故というか、失敗から生まれたチョコレートなんですよ」

「へえ、偶然から生まれたチョコか」

真由美の方から話しかけてくれた事に浮かれてしまい、上ずった声が出ないようにするだけで精一杯だ。真由美にとって自分は唯の客では無く、彼女と親しく会話を交わす間柄なのだと思えた。眼の前で、真由美が完璧に思える笑顔を浮かべた。

一日空けて、実はいつものようにカフェへと来店した。幸運な事に客は誰もおらず、アルバイトの姿も見当たらない。

今日は真由美と二人きりで、この時間を邪魔する者は誰もいない。そう解った瞬間に動悸が激しくなり呼吸が乱れてしまう。最近、アルバイトは実の事を、嫌な虫でも見るような眼を向けてくるので、実は内心気分の悪い思いをしていたのだ。

「あれ？ 真由美さん、今日は何だか元気が無いですね。どうしたんですか？」

真由美は何となくいつもと違い、血色が悪いように見える。

「そう見えますか？ そんな事無いですよ」

真由美は否定したが、いつも彼女を見ている自分だからこそ、様子が違うという事に気付く。

「鈴川さんは、優しいのね。私、鈴川さんのような人に、もつと早く出会えていれば良かった」

「えっ？」

濡れたような黒い瞳に見つめられ、実の思考はくらくらした。その瞳に吸い込まれそうになる。

今の言葉は一体どういう意味なのだろう。実は胸が高鳴った。

しかし、真由美はそれ以上何も語ってくれない。しばらくすると店に客が入ってきて、実はそれ以上の事が聞けなくなってしまった。

いつもならば、真由美のほっそりとした首には、指輪を通したネックレスが下がっているのだが、今日はネックレスをしていない。真由美に一体何があったというのだろう。疑問を抱えたまま、実は店を出た。

次に来店した時、真由美は頬にガーゼを当てていた。白いガーゼが痛々しく、驚いて実は声を掛けた。

「真由美さん、どうしたんですか？ その頬」

真由美は弱々しく微笑むだけだった。

「本当に何でも無いの」

何者かに暴力を受けたのだろうか？ おとついても真由美は様子がおかしかった。もしかして、夫婦仲が上手くいってないのでは？

「……鈴川さん。私はガナッシュのようにはいかなくて。失敗ばかり」

真由美は実にだけ聞こえる程度の小さな声で、そつと言った。

「あ、ごめんなさい。お客様にこんな話なんかして。鈴川さんなら話しやすく、つい口が滑ってしまったの」

そう言いながら俯いた真由美の肩は小さく震えていた。その様子は萎れてしまった花の様に力無く、実の体はかっとな熱をもった。

今日も真由美の首には、ネックレスが見当たらない。

「真由美さん。一体何があったんですか？ 僕でよかったら、力に

なります」

「ありがとう鈴川さん。優しいのね。私、夫より先にあなたと出会っていたら良かった」

小さな声で話をしているので、いつもより真由美と距離が近い。黒々とした瞳を潤ませて、上目遣いに見上げられれば、実はその魔力に飲み込まれてしまった。

真由美は彼女の夫と上手くいつてないんだ。その類は夫に殴られたのだろうか。

腹の底から怒りがふつふつと湧き上がってくる。何とか暴力を振るう夫から解放してやりたい。この、細い肩を自分が守ってやりたかった。

その日から、実は毎日カフェに通うようになった。真由美が仕事が終わる所を待ち伏せし、彼女が帰宅するのを後をつけて見守った。辿りついた真由美の家は、高級住宅街にあった。夫とは一体どんな男なのだろう。本音を言えば、このまま家に押し入ってしまいたい。しかし、実際にはどうする事も出来ず、ただ外から明かりが灯るのを見守るしかできなかった。

「真由美さん、旦那さんはどんな人なんですか？」

客がいない所を見計らうと、実は思い切って真由美に聞いてみた。今日の真由美の顔にガーゼは見当たらず、心配だった醜い跡もない。

実の言葉に真由美は眉を八の字に歪めて微笑んだ。

「……私には勿体ないくらいの人」

「真由美さん、こんな事は言いたくないけど、旦那さんと上手くいつてないんじゃない？ 別れないんですか？」

「あの人は別れないわ。独占欲がとて強い人なの」

思わず実は真由美の白い手を掴んでいた。僕が貴女を守ってみせる。黒々と濡れたような瞳を見つめ、眼に力を込めた。

口を開こうとした時、真由美がアルバイトに呼ばれた。咄嗟に手

が離れる。名残惜しげに手を伸ばそうとした時、忌々しげにアルバイトが実を見ているのが分かって手を引っ込めた。

次の日から真由美は彼女の夫と帰宅するようになった。

あれが真由美の夫か。随分と年上で、まるで老人のようじゃないか。とてもじゃないが、真由美とつり合う男には見えない。真由美に暴力を振るう男なのに、いかにも真由美を大事そうに振る舞う様子が腹立たしい。独占欲が強いというのは本当だろう。このように毎日夫が迎えに来るのだから。

これでは真由美はこの男から解放されないうまま、ずっとこの男が死ぬまで拘束され続けてしまう。自分が助けてやらねば。実は拳にぐっと力を込めた。

数日後、真由美の夫は通り魔に刺されて死亡した。死因は失血死で、刺されていた箇所は三十か所以上に及んでいた。犯人はまだ捕まっていない。

これで、真由美は自由になれる。実は晴れやかな気持ちで一杯だった。

「鈴川実さんですね」

黒いスーツを着た二人組の男に呼び止められた。男は警察手帳を取り出すと、実に見せつけた。

「殺人容疑で署に同行してもらいますよ。それと、あなたには長野真由美さんに対するストーカー規制法違反容疑もかかっています」

実は何を言われているのか理解できないまま、思考が真っ白になった。どうして？ 嘘だろう？

「真由美さん、こんな事になってお気の毒です。あんなに良い旦那さんだったのに」

店のアルバイトの子が泣きながら述べた。ポツポツと降り始めた

雨に石畳はシミを作る。灰色の空は、葬式に参列者の気持ちを表しているかのように厚い雲で覆われていた。

「ええ、あの人がいなくなるなんて、今もまだ信じられないの」

真由美はこみ上げる涙をぬぐう様に、眼元にハンカチを当てた。そのまま、震える手で口元を覆う。

その隠された口元には笑みが浮かんでいた。

Menu6 チョコレート（後書き）

読んで下さいまして、ありがとうございました。

Menu 7 ケーキ

これは、さきちゃんが産まれる前のお話です。

さきちゃんはお友達と一緒に、お空の上から地上を見下ろしていました。

昼はふわふわの雲に乗って。夜はお星様の上で。

さきちゃんは乗っている雲の上から身を乗り出して、地上を眺めました。地上では沢山の人達が、忙しそうにそれぞれの生活を過ごしています。

「ねえ、誰にするか決まった？」

お友達がさきちゃんに聞きました。みんなこの人と決めては飛び込んで行くのです。

でも、さきちゃんにはまだ決められません。

「うーん、まだ。どうしようかな」

「僕はあの人かな。とっても明るくて、優しそうだから」

お友達は地上を指さして言いました。

その指した先には優しそうな女の人があります。確かに、あの人ならとても明るそうだとさきちゃんは思いました。

でも、さきちゃんはさっきからあっちの方で会話をしているカッブルが気になって仕方ありません。一体何の話をしてるのでしょうか？
さきちゃんはもつと二人の傍に近付いてみることにしました。

「ねえ、いっちゃん。私、そろそろ子供がほしいの」

「うん、そうだなあ。俺達結婚して四年目だし、子供ができて良

い頃だよな」

「そうよね。でも、避妊をしている訳でもないのに出来ないのは、どうしてだと思う？　もしかして、何か問題でもあるんじゃないかしら」

「奈々子」

「私、不妊治療専門の病院へ行ってみようと思うの」

「うーん、どうだろう。それはちよつと早いんじゃないか？　単にタイミングが悪かっただけじゃないか？」

「ううん。実は私、半年前から基礎体温を測っているし、タイミングも見ているの。でも、妊娠する気配が無くて。だからおかしいな
って思ってたの」

「そうだったんだ。うん、分かったよ。何かあったら教えてくれ。
俺も協力するよ」

どうやら二人は子供が欲しいようです。でも、授からないようでした。実際子供を授かりたくても出来ない人は沢山います。

さきちゃんは奈々子さんのお腹を見ました。奈々子さんのお腹はとても軟らかそうで、お空の真っ白い雲のようにふわふわとして、居心地良さそうです。

なのに、どうして赤ちゃんが出来ないのでしょう？

さきちゃんは奈々子さん達が、どうにも気になって仕方ありませんでした。

数日後、奈々子さんは病院にいました。どうやら、色々と検査を受けたようです。この頃奈々子さんは、何度もお仕事を休んでは病院に通っていました。

今日の奈々子さんはため息を何度も吐いています。とても疲れた様子で元気がありません。

どうしたのでしょうか？

「いっちゃん。今日ね、病院で検査してもらったんだけど、痛くて辛かった」

「そうか、しんどかったんだ。検査って大変なんだなあ」

「うん。それでね、先生から、次回はいっちゃんも一緒に検査を受けるように言われたの」

「えっ？ …うん、そうだね。分かった。仕事が休めるか聞いてみるよ」

「ありがとう。お願いするわ」

二人は揃って病院を受診し、検査を受けました。

色々な検査の結果、奈々子さんに異常が見つかりました。

奈々子さんには赤ちゃんが宿るために必要な、卵がある時と無い時があったのです。だから、赤ちゃんを授からなかったのでしょうか。家に帰った二人は何度も相談し合いました。そして、不妊治療を受ける事に決めたのです。

それからの奈々子さんは、長い間病院に通い続けました。

薬を使って治療が続けますが、一回、二回目の治療は上手くいきません。奈々子さんは、どんどん元気が無くなりました。

三回目の治療を受けた時、ついに奈々子さんの治療は成功しました。

卵は無事、奈々子さんのふわふわしたお腹の中で育ち始めたのです。

奈々子さんと樹さんは、喜びを噛み締めました。

奈々子さんの準備が無事整った事を知ったさきちゃんは、迷わず奈々子さんの、お腹の卵に飛び込みました。さきちゃんは一生懸命に治療を受けている奈々子さんと、それを傍で支えている樹さんの事が大好きになっていたのです。

「樹さん、奈々子さん。わたしのお父さんとお母さんになってね」

さきちゃん、奈々子さんのお腹のお布団に包まれました。そこは、とっても温かくて居心地良い場所でした。

さきちゃんが奈々子さんのお腹に宿って六カ月が経ちました。初めの頃はとっても小さな体でしたが、今では随分と大きくなって、手や足を動かすとお腹の壁に当たります。奈々子さんや樹さんの声が、はつきりと聞き取れるようになりました。奈々子さんは優しい声で、お腹の中のさきちゃんに話しかけてくれます。さきちゃんは返事の代わりにお腹の壁をぽこんと蹴りました。奈々子さんが嬉しそうに笑う声が聞こえると、さきちゃんも一緒に楽しくて、幸せでした。

それは、ある日突然襲ってきました。

苦しいよ、お母さん！

さきちゃんは、体のあちこちが痛くてバラバラになりそうです。ぎゅっと全身が引き絞られて、息ができません。まだ、奈々子さんのお腹に入って六か月しか経っていないのです。お腹の中から外に出るには、まだ準備ができていません。

助けて！

さきちゃんは辛くて苦しくて、身動きできなくなりました。

わたし、このまま死んじゃうのかな？

すると、奈々子さんの苦しそうな声が聞こえてきます。ああ、お母さんも苦しんでる。

「私の赤ちゃん、頑張つて。大丈夫、すぐに病院に行くからね」
奈々子さんの苦しそうな声が、何度も何度も聞こえました。誰かが救急車って言ってます。

さきちゃんはそのまま意識が無くなってしまいました。

「私の赤ちゃん、頑張つて。お願い、生きていてね」

お母さんの声が聞こえてきます。いつの間にか、痛みは無くなっていました。もう、どこも苦しくありません。

お母さん。わたし、生きてるよ。がんばったよ。

さきちゃんは、返事の代わりにお腹をぽんと蹴りました。返事をする、奈々子さんがあつと声を上げました。

さきちゃんは無事を伝えたくて、何度も何度もお腹の壁をぽこぽこ蹴りました。

「ああ、良かった！ 私の赤ちゃん、良く頑張ったね。ごめんね、苦しかったでしょう。お母さん、もう、無理しないから」

奈々子さんの声はかすれていて、度々つかえながら言いました。「赤ん坊も、奈々子も無事で本当に良かった。一時はどうなるかと思つたよ。もう、このまま出産まで仕事は休んだ方がいいな」

「うん、そうする。いつもありがとう、いつちゃん」

お父さんの声も聞こえます。

さきちゃんは、危うく早産しかけたが、無事に落ち着きました。

その日以降、奈々子さんは仕事を休むことにしました。

「もう、十か月だな。予定日まであと一週間か。ああ、無事産まれてくれよ」

「そうだね、赤ちゃん。お母さん、あなたに会えるのが楽しみだよ」
大丈夫だよ、お父さん。わたしもだよ、お母さん。

ばしゃん！ とうとう破水が起きました。いよいよ出産です。さきちゃんの周りを包む、お腹の壁がぎゅうきゅうしています。

「私の赤ちゃん、一緒に頑張つて乗り越えようね」

うん。いっしょにがんばるよ。大丈夫、すぐに会えるからね。

全身がぎゅうきゅうと締め付けられて、頭の形が歪みます。苦し

いけれど、それに耐えて進みます。

外からは、お母さんの声が聞こえてきます。うんうんと、とても辛そうな声です。

お母さんもがんばってるんだ。わたしだって！

さきちゃんは、ゆっくりゆっくり体を回転させました。少しでも外へつながる道を通り抜けやすいように。

突然、周りが眩しくなりました。体の締め付けがするりと無くなります。ひんやりとした空気にさらされて、とても寒くなりました。さきちゃんはお母さんのお腹の中から、外の世界に出たことが分かりました。

思いつきり、さきちゃんは声を張り上げました。声を張り上げると胸が大きく膨らんで、どっと血が全身をめぐるしました。

わたしは生きてる。

声は言葉にならなくて、代わりに甲高い鳴き声になって響きました。

やった！ 無事に産まれる事が出来たんだっ！

大きな事をやりとげたという気持ち、体中をぐるぐると満たします。あと、ほんのちよっぴりですが、二度と戻れない、お母さんの温かいお腹の中が恋しくなりました。

「可愛い女の子ですよ、お母さん」

誰かが言ってます。

さきちゃんは泣き続けました。お母さん、どこ？

「私の赤ちゃん、産まれてきてくれてありがとう」

お母さんの優しく震えるような、ぴかぴか輝く声が聞こえます。体が温かい何かに包まれました。とくん、とくん。聞きなれた、お母さんの心臓の音が聞こえます。お父さんが泣きそうな声で、良くやっただって繰り返してます。

お父さん、お母さん、初めまして。ようやく会えたね。

「咲ちゃん、お誕生日おめでとう。三歳になったんだよ」

さきちゃんはお母さんが用意してくれた、イチゴのケーキを頼張りました。何層にも重なっているケーキは、甘酸っぱいイチゴの香りと、とろとろのクリームで覆われています。もぐもぐすると、スポンジがふわふわとなりました。

「咲、誕生日おめでとう。あつという間に三歳になったな。咲、前は知らないだろうけど、お父さんとお母さんの間には、なかなか赤ちゃんを授からなくてね。でも、諦めないでいたら、お前が産まれてくれたんだよ」

「そうよ、咲ちゃん。だから、このケーキみたいに家族みんなの思い出を、少しずつ重ねて行きたいのよ」

さきちゃんは知っています。お父さんとお母さんがとっても苦勞して、さきちゃんを産んでくれた事。

「うん、わたし知ってるよ。お空の上から見てたもの」

頼もしいお父さんと、優しいお母さん。二人の笑顔はお陽さまみたいですよ。いつもと変わらないお家の中は、お母さんのお腹の中ですよ。

温かい笑顔に囲まれて、さきちゃんの笑顔も自然とお陽さまみたいに輝きました。

Menu7 ケーキ（後書き）

読んで下さいましてありがとうございます。

今回で最終回となりました。

この企画を運営してくださった、桜庭春人さんには深く感謝いたします。また、最後まで楽しく参加する事ができたのは、共に参加して下さった皆様と読んで下さった皆様のおかげです。

皆さま、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1792s/>

Caf e Sweets

2011年8月10日03時23分発行